

共存からジェノサイドへ：パレスチナの組織的破壊

19世紀、オスマン帝国統治下のパレスチナは、共同体間の調和の象徴でした。ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人——主にアラブ人人口の中に約25,000人のセファルディおよびミズラヒ系ユダヤ人——がエルサレム、ヘブロン、ヤッファなどの都市で共存していました。彼らは市場、近隣、文化的な伝統を共有し、オスマン帝国のミレット制度はユダヤ人のような少数派に保護された地位を与えていました。わずかな緊張が生じることもありましたが、暴力的な対立はまれで、宗教を超えた社会的絆がしばしば存在しました。この脆弱な平和は、ヨーロッパのシオニストの野望を先住パレスチナ人の多数派よりも優先した植民地プロジェクトによって破壊され、77年にわたる土地の収奪、アパルトヘイト、ジェノサイドへとつながりました。

シオニスト運動は、1897年のシオニスト会議でテオドール・ヘルツルによって正式に組織され、1899年にパレスチナをユダヤ人国家の目標と宣言しました。これはヨーロッパの反ユダヤ主義と植民地的な傲慢さに駆り立てられたものでした。ヨーロッパの資本によって資金提供された小さな入植地がパレスチナ全土に広がり、在不在のオスマン帝国の地主からの土地購入によって地元の農民を追い出しました。現代語としてのヘブライ語の復活は分離主義的なアイデンティティを強化し、アラブ人と統合されていた既存のユダヤ人コミュニティを疎外しました。1917年、シオニストのロビイストであるバロン・ロスチャイルドによって仕掛けられたバルフォア宣言により、英国の外務大臣アーサー・バルフォアは、パレスチナ——彼に与える権利のない土地——をユダヤ人の故郷として約束し、アラブ人多数派の権利と願望を無視しました。

1930年代には、シオニスト団体とナチス・ドイツ間の不気味な協定であるハーヴァラ協定によってさらにエスカレートしました。この協定は、60,000人のドイツ系ユダヤ人とその資産をパレスチナに移し、ドイツ製品と交換しました。1939年までにユダヤ人の移民が45万人に急増する中、イルグンやレヒといったシオニストの準軍事組織がテロを繰り返しました。1946年のキング・デビッド・ホテル爆破事件（91人死亡）や、英国およびアラブの標的への暗殺により、英国の委任統治は統治不能となりました。1947年の英国の撤退は、国連の分割計画につながり、極めて不公正なこの計画はナクバを引き起こし、何十年にもわたるパレスチナ人の苦しみの舞台を整えました。

国連分割計画の不公正

1947年の国連分割計画（決議181）は、公正さと自己決定に反する植民地的な分割でした。パレスチナ人が人口の67%（120万人）、ユダヤ人が33%（60万人）であったにもかかわらず、この計画はパレスチナの土地の56%をユダヤ人国家に割り当て、ヤッファやハイファといった肥沃な沿岸地域や主要な経済拠点を含めました。何世紀にもわたってそこに住み、土地の94%を

所有していたパレスチナ人は、ヨルダン川西岸とガザの断片化された、耕作に適さない43%に追いやられました。この計画は人口動態の現実を無視しました：ユダヤ人は土地の7%未満を所有し、ヤッファを除くすべての地区で少数派でした。共同の聖地であるエルサレムは、パレスチナ人の主張を無視して国際管理区域として提案されました。アラブ人の多数派は、権利の侵害としてこの計画を拒否しましたが、シオニスト指導者は、より大きな領土支配への足がかりとしてこれを受け入れ、後に割り当てられた境界を越えて拡大したことでその証拠を示しました。西側諸国が支配する国連は、パレスチナ人に相談せずにこの分割を押し付け、植民地的な傲慢さを反映し、シオニストの願望を先住の主権よりも優先しました。

ナクバとその遺産

1948年、イスラエルの国家宣言はナクバ——アラビア語で「大惨事」を意味する——を解き放ちました。アラブ人口の半分以上、70万人以上のパレスチナ人が、シオニストの民兵によって500以上の村が破壊される中、強制的に追放されたり、恐怖で逃亡したりしました。デイル・ヤシンでの虐殺（100人以上の民間人が殺害）のような事件は恐怖を植え付けました。パレスチナ人はガザ、ヨルダン川西岸、ヨルダン、レバノン、シリアの難民キャンプに追いやられ、帰還が禁止されました。この民族浄化は、ユダヤ人国家基金の役人ヨセフ・ウェイツのような人物によって綿密に計画され、彼は1940年に「この国には両方の民のための場所はない…唯一の解決策はアラブのいないパレスチナだ」と宣言しました。ウェイツの強制「移送」のビジョンはナクバの残虐性を形成し、パレスチナ人の収奪に今も響いています。

ヨルダン川西岸での収奪と移住

1967年のイスラエルのヨルダン川西岸占領以来、収奪は絶え間なく続いています。現在、70万人以上のイスラエル人入植者が、パレスチナ人の盗まれた土地に建てられた違法な入植地に住み、ヨルダン川西岸を分断された飛び地に分断しています。イスラエルの政策——土地の没収、住宅の破壊、制限的な許可制度——は数万人の人々を移住させました。B'Tselemによると、1967年以来、2万軒以上のパレスチナ人の家が破壊され、しばしば許可がないという口実で、これはイスラエルがほとんど発行しません。ヨルダン溪谷や東エルサレムのような地域では、コミュニティ全体が立ち退きの脅威に直面しています。たとえば、マサフェル・ヤッタの1,000人の住民は、軍事区域の拡大のために立ち退きの危機に瀕しています。イスラエルの法律と軍事保護に支えられた入植地の拡大は、ヨルダン川西岸の土地の40%以上を奪い、パレスチナ人は165の「島」に閉じ込められ、厳格な管理下に置かれています。検問所、道路封鎖、2004年に国際司法裁判所が違法と判断した分離壁は、家族、農地、生計を分断し、パレスチナ人の生活を耐え難いものにしています。この組織的な盗みは、建築権の否定と相まって、移住を強制し、アパルトヘイトを強化しています。

ヨルダン川西岸での入植者の暴力

ヨルダン川西岸でのイスラエル人入植者の暴力は、国家の共謀によって可能となった日常的なテロです。しばしば武装し、イスラエル軍によって保護された入植者たちは、パレスチナ人の農民、牧畜業者、村々を攻撃し、彼らを土地から追い出すことを目指しています。2024年だけ

で、国連は1,200件以上の入植者による攻撃を記録し、放火、破壊行為、身体的暴行が含まれます。フワラやクスラなどの村では、入植者たちが家、オリーブ畑、家畜を焼き、2023年のフワラのポグロムのような事件では、パレスチナ人1人が死亡し、数百人が負傷しました。イスラエル兵はしばしば傍観するか、自己防衛するパレスチナ人に介入します。B'Tselemは、入植者が軍の前哨基地に支えられ、パレスチナ人にとって「立ち入り禁止区域」を作り出し、暴力によって数千エーカーを奪ったと報告しています。ヒルトップ・ユースのような過激な入植者グループは、パレスチナ人の追放を公然と目指し、入植政策を監督するベザレル・スモトリッチのような政府高官に後押しされています。この暴力はほとんど起訴されず、民族浄化の手段として、パレスチナ人の存在を不安定にしています。

ジェノサイドのレトリックと行動

イスラエル指導者のレトリックは長い間パレスチナ人を非人間化し、残虐行為を正当化してきました。1940年のヨセフ・ウェイツのアラブのいないパレスチナの呼びかけは、数十年後、元将軍オバディア・ヨセフ・エイタンのような人物に反映され、1983年にパレスチナ人を「瓶の中の酔ったゴキブリ」に例え、抑圧と殲滅の卑劣な比喻を使いました。最近では、2023年10月、ヨアヴ・ガラント国防相がガザに「完全な包囲」を課し、「電気なし、食料なし、燃料なし…我々は人間の動物と戦っている」と宣言しました。財務相ベザレル・スモトリッチは、ガザの完全な破壊を主張し、2023年に「ガザを消し去る」ことが必要だと述べ、飢餓と爆撃を支持しました。これらの発言は、封鎖や絶え間ない空爆といった行動と結びつき、国連のジェノサイドの定義——集団を破壊する意図的な行為——に一致します。1967年以来毎年行われるエルサレム旗行進では、数千人のイスラエル超国家主義者や入植者が東エルサレムを通過しながら「アラブに死を」と叫び、警察に保護された憎悪の儀式を行います。2024年には、行進者がパレスチナ人の店やジャーナリストを攻撃しましたが、重大な結果はなく、ジェノサイドの感情が正常化されました。

ガザの進行中のジェノサイド

2百万人が暮らす365平方キロメートルの監獄であるガザは、絶え間ない恐怖に直面しています。2023年10月以来、イスラエル軍はガザ保健省の推定によると、60,000人以上のパレスチナ人を殺害し、その70%が女性と子供です。ガラントとスモトリッチの包囲によって強化された封鎖は、ガザ住民の80%を飢餓に追い込み、180万人が急性食料不安に直面しています（国連、2025年）。2025年に設立されたガザ人道財団の援助拠点は死の罫です：743人以上のパレスチナ人が殺され、4,891人が負傷し、しばしば食料を求める際にイスラエルの銃撃や砲撃によって被害を受けました。アムネスティ・インターナショナルと国境なき医師団はこれらの行為を戦争犯罪の可能性があると呼び、国連はイスラエルの飢餓政策をジェノサイドと分類しています。病院、学校、難民キャンプは廃墟となり、ガザのインフラの90%が破壊されました。子供たちが撃たれ、家族が瓦礫の下に埋まり、群衆が刈り取られる残虐さは、民を消し去る計算された意図を反映しています。

結論

19世紀の共存から今日のジェノサイドまで、パレスチナの物語は植地的な盗み、裏切り、絶え間ない残酷さの物語です。国連分割計画の不公平、ナクバの民族浄化、ヨルダン川西岸での進行中の収奪と入植者の暴力は、抑圧の連続を形成します。ウェイツからガラントまでのジェノサイドのレトリックは、「アラブに死を」の叫び声によって増幅され、パレスチナ人の苦しみで繁栄するシステムを支えます。60,000人以上の死者を出したガザの虐殺は、悲劇だけでなく、人類に対する犯罪であり、世界的沈黙によって可能となっています。パレスチナ人の闘争は、記憶だけでなく正義を要求します。